

松柏クラブの小旅行に参加して

(旅行日；2025.6.6.)

小江戸と呼ばれている川越に一度は行ってみたいと思っていた。今回、松柏クラブよりお誘いがあり参加した。最近の天候不順（雨天や寒暖差）で当日の天候が気になったが、幸い晴天となり、むしろ午後には真夏を思わせる酷暑になった。主な観光スポットは3ヶ所、坂戸の聖天宮、川越の喜多院、五百羅漢及びメインの川越の蔵造り街並みの散策である。

聖天宮は 昔は何もなかっただろうと思われる所に忽然と現れるような道教のお寺。実は、先月末に坂戸に従弟の見舞いに来ていたが、このようなお寺があるとは全然知らなかった。豪華絢爛な外観、内部の彫刻の柱、壁、天井等々に圧倒された。なんでも不治の病から道教を信仰したおかげで復帰した台湾のお坊さんが“お告げ”によりこの地に、15年の歳月を費やし建立したものだらしい。建立の費用やどんなおつげだったのか と言う質問には答えてくれなかったが、何でも日本最大の道教のお宮らしい。元気なうちに、本場の台湾の道教のお寺も訪れ、現地、台湾人がどのようにお参りしているか見たくなった。

喜多院、五百羅漢も素晴らしかった。やはり日本人には、静寂の中に佇む神社、仏閣の方が何か心静まるものがある。喜多院の大看板の前での集合写真の撮影後、院内の見学。廊下の隅々に“一隅を照らす”の言葉が、アレ何処かで見たぞ！ そうだ、約20前に比叡山に行った時、延暦寺で見たことを思い出した。これで漸く、ここは我が家の宗旨の天台宗のお寺だと認識した。パンフをよく見るとここは関東天台宗の学問所・修行所として栄えたところであった。度々の災難を受けながら復興され、特に徳川家光公の命により江戸城紅葉山の御殿を移築したとあり貴重な建造物であることが分かる。渡り廊下からみる（紅葉山）庭園もよく手入れされ綺麗だった。五百羅漢は、合計で533体の石像が彫られており、人間のあらゆる喜怒哀楽が表現されており自分や両親に似た顔や表情のものが必ずあると言われたが、参加の皆さんは見つけることができたのであろうか？ 私は自信がなかったので、売店で絵葉書（モノクロ写真集）を購入した。それに添付してあった説明（書）を転載する。

初かり亭（レストラン）での昼食後、札の辻を基点に三々五々“蔵造りの街並み”を散策した。うわさ通りここはひとりでゴった返していた。真夏を思わせる気温の中“時の鐘”“埼玉りそな銀行”“旧山崎家別邸”“菓子横丁”等を巡るのがやっとで、元町（無料）休憩所に逃げ込み、冷たいものを飲みながら小学生の団体をぼんやり見学した。本当はこの通りの蔵造りの旧家をゆっくり見て回りたいかったが、この暑さと人込みで断念。小学生をガイドしているのは、地元のシニアの方々のようで、出来れば希望者だけでもこのようなガイドの説明があれば と思ったことであった。

川越の名物は“うなぎ”“いも恋”“芋を練りこんだうどん等々。名物にうまいものなし と言うが、お土産に買った松陸屋の“芋なっとう”は美味しかった。

このクラブには、前々から、女房がお世話になっているが、彼女にとって木曜日は午前 G.Golf、昼から麻雀とまさに黄金日である。“亭主元気で留守がいい”の逆バージョン、家庭安泰です。兎に角このクラブは居心地が良く、楽しいクラブらしい。私も、今回の旅行で実感できた。機会があればまた参加したい。

(ICT アドバイザー 武藤記)

（喜多院の五百羅漢について）

喜多院の五百羅漢は、天明二年（1782 年）川越在の農民、北田島村の志願により発願され創られた。その後、慶巖・溪立・祐賢などによって、その偉業が受け継がれ文政八年（1825 年）に完成された。五百三十八体におよぶ石仏群は、実にユーモアに満ちていて人間臭い魅力がある。

両手でつつみ込めるほどの羅漢の顔にはさまざまな表情があり、庶民の喜怒哀楽があますところなく表現されて、身近な親しみを感じさせてくれる。羅漢には古くからいろいろな言い伝えがある。深夜、羅漢の頭を撫でて廻ると、その中で必ず一体は温かく感じるものがあり、翌日その顔を見ると自分の身近な人に良く似ているという。

遠く時を越えて心に安らぎを与えてくれる羅漢——。

泣き、叫び、笑いそして話しかける石仏たちからは、人間への慈悲の心や当時の庶民の祈りがうかがえる。羅漢に込められたひたむきな精神。その生命力は、さまざまな姿で石の上に鎮座し今も生き続けている。合掌



